

リオン・ フォイヒトヴァンガー
『死力を注ぐ生 日記』

L. Feuchtwanger: Ein möglichst intensives Leben
Die Tagebücher 1906-1940

浅野 洋

ASANO Hiroshi

リオン・フォイトヴァンガー 『死力を注ぐ生 日記』

L. Feuchtwanger: Ein möglichst intensives Leben
Die Tagebücher 1906-1940

浅野 洋

ASANO Hiroshi

要旨：リオン・フォイトヴァンガーの死後60年経過して、『死力を注ぐ生 日記』が2018年11月にAufbau社から刊行され、その資料的な価値は高く、研究に寄与することが期待されている。とくにサナリー・シュル・メールの亡命時代の文学活動、文学者、知識人、女性との交友関係が明らかになると同時に、1936、37年のモスクワ訪問における現地での受け入れ状況、裁判の立ち合い、スターリンとの会見等の実態も記録され、これまで親ソヴィエトと見なされてきたフォイトヴァンガー像も塗り替えられることになる。本稿では、日記の発見と刊行の経緯を明らかにし、記述の特徴にも触れてみる。

キーワード：亡命作家、ナチス政権、トーマス・マン、サナリー、モスクワ

1. リオン・フォイトヴァンガー『死力を注ぐ生 日記』¹

これまで一部の研究者にのみ公開されてきたフォイトヴァンガーの日記が、1958年にサンタモニカで死去して以来じつに60年経過して刊行された。公刊されたことにより、リオン・フォイトヴァンガーのバイエルン時代、ベルリン時代、南仏のサナリー時代の生活の全貌が明らかになり、フォイトヴァンガーの私生活の実像、反ファシズムの立場も鮮明となるだろう。

1 Lion Feuchtwanger: Ein möglichst intensives Leben Die Tagebücher, herausgegeben von Nele Holdack, Marje Schuetze-Coburn und Michaela Ullmann, Berlin, 2018. 以下、ページ数のみを示す。

刊行が遅れた理由としては、ガーベルスベルガー式の速記法で書かれているために判読、解読の作業に多大な時間を要したこと、記述の範囲が、文学、政治、個人的な人間関係、多くの女性との性愛関係など多岐にわたり、とくに私的な関係においては否定的な表現の多いことも起因しているようである。トーマス・マンの日記が公開を前提として書かれ、公開の条件も死後25年経過して許可するという念の入れ方であり、そのうえ都合の悪い部分は自ら焼却したことも考えると、両者の日記は記述のスタイルそのものが対照的といえよう。

トーマス・マンが死後に読まれるように日記のなかで自己演出しているのにたいし、フォイヒトヴァンガーは、まず日記の存在そのものを否定していた経緯もあり、死後の公開ということは前提になかった。記述のスタイルも、記録、備忘録風であり、読者のいない書き物である。日々の出来事をメモ的に書き留める場合もあり、政治の出来事に厳しいコメントを記している場合もある。いずれにせよ事実を隠蔽することはなく、直截的であり、とくに性的な表現にも配慮することは一切なく、小説の表現法と較べると顕著な相違が見られる。例えば、1938年を振り返る描写は以下のようである。「非常によい年というわけではなかった。仕事はうまく進み、エーファ、マルタとの関係も満足のいくものだった。しかし外部での成功はなく、経済的にさほどよかったわけではない。国籍がないことからくる困難が山積み、戦争となれば不快きわまる気配。そして老い、前立腺、性的能力の欠如もあきらか」。(S. 451)

フォイヒトヴァンガーの日記は、フォイヒトヴァンガーが生前に、秘書であったヒルデ・ヴァルドに託したものであり、女史の自宅で当時南カリフォルニア大学教授のハロルド・フォン・ホーエによって発見された。つまりなぜヒルデ・ヴァルドの自宅に秘匿されていたかが問題であり、その理由は、フォイヒトヴァンガーが亡命者の身であり、アメリカ国籍を申請中であることから、不利益な表現の開示を拒んだことが考えられ、親ソヴィエトの作家というレッテルを張られていたために、アメリカ国籍申請の障害となることを避けたかったわけである。トーマス・マンとは違った意味で日記の公開を憚ったことになる。「フィルターのかかっている日記」(クラウス・モディック)であるがゆえに、フォイヒトヴァンガーは「危険」を察知したのであり、これがフォイヒトヴァンガーが秘書に託した理由でもある。つまりフォイヒトヴァンガーにとってアメリカの亡命時代は、アメリカに到着してからずっとFBIの監視下にあったことが、亡命者としての実生活に大きく影響を及ぼしていたわけである。実際にフォイヒトヴァンガーが死去した翌日にはマルタのアメリカ国籍が認可された事実を見てもわかるように、フォイヒトヴァンガーにはアメリカ国籍の獲得の可能性は全くなかったわけである。

この事情をクラウス・モディックは、『サンセット』のなかでこのように説明する。「避難所

は、労働のなか、沈黙した流刑生活、白紙の治外法権、みずから創造した故郷のなかにしかなかった。フォイトヴァンガーが、残念ながらモスクワの書籍とばか丸出しのミスをして以来、西側ではかれのことは頑固なスターリニストとみなされていた。東側ではベッヒャーのおべっか使いが、かれのことをようやく先ごろアメリカ帝国主義のかばん持ちと呼んでいた。というのはフォイトヴァンガーは長編に『アメリカのための武器』という名前を付けたからだ。いまでは東のマーケットのために『ワイン畑の狐』と名付けたので、この長編には二つの題名がある。やはり妥協的で、柔軟で、朗らかでなくてはならないのだ。これもまたかれの成功の秘密のひとつなのだ。それでも破壊分子、アスファルト文学者としての一面が彼を叱責することになるのであり、かれの著書をボイコットした。一方でかれを庶民的なボヘミアン、補欠の巨匠として嘲笑するひともある。そして双方の人びとがかれの世界的な成功をうらやむので、かれのことをだれもが文学の大産業家とみなすことになる²。フォイトヴァンガーにとって、十分な印税と翻訳による著作権料に支えられた表向きの華やかな生活とは裏腹に、作家生活の基盤は脆弱であり、見通しの立たない、展望を持ち得ない生活であったことが分かってくる。アンネ・ハルトマンの論文³によって、フォイトヴァンガーがモスクワ訪問でスターリン、ソヴィエト連邦に否定的、批判的な表明をしていたことが内部文書で実証されたとはいえ、親ソヴィエトの作家と見られたことは、亡命生活者にとってマッカーシーの赤狩りに加えて心理的な抑圧となった。『モスクワ 1937年』の影響、つまりスターリンとのインタビュー、会見の影響が戦後にまで及んでいたわけである。

つぎに問題となるのは、この日記が 1906年から1940年までで終わり、不可思議なことにカリフォルニア時代の日記は存在せず、継続的に書き留められてきた日記が、カリフォルニアでは途絶えていることである。日記の存在によって不利益をもたらされる人物によって隠匿されているのか、焼却されたのではないかと推測されている。つまりは、フォイトヴァンガーと秘書のハイデ・ヴァルドが性的関係にあったことは知られている事実であり、女史が発覚をおそれ隠匿したのか、なんらかの形で処分したのではないかということである。さらにこの日記の刊行が遅れた理由には、人物にたいする否定的な表現が多すぎたり、フォイトヴァンガーが性的にあまりにイモラル、アモラルであったことが挙げられよう。

2 Klaus Modick, *Sunset*, Frankfurt am Main, S. 24.

3 Anne Hartmann: „Ich kam, ich sah, ich werde schreiben“ Lion Feuchtwanger in Moskau 1937. Eine Dokumentation, 2017.

1933年1月30日のヒトラーの政権掌握のあとに、トーマス・マンはミュンヘン大学でリヒャルト・ヴァーグナーに関する講演をしたあと、アムステルダム、ブリュッセル、パリに講演旅行に出たまま1951年にスイスに帰還するまで長い亡命生活を送ることになる。フォイヒトヴァンガーもまたアメリカでの講演の途中であった1933年1月30日、ワシントンのドイツ大使、フリードリヒ・ヴィルヘルム・フォン・プリットヴィッツ宅で夕食の招待を受けていたが、その日の5時にヒトラーは首相に任命され、最初の閣議を開いていた。火曜日にプリットヴィッツはフォイヒトヴァンガーにドイツに帰国しないように警告するために電話した。フォイヒトヴァンガーは、ヒトラーが戦争を意図していることを予見し、ドイツ帰国を断念し、そのままスイス、南仏にやむなく避難先、亡命先をもとめた。両者にはすでにドイツで文筆活動の基盤があり、ベストセラー作家であることから出版条件は恵まれ、他の作家とは比較すべもなかった。というわけで20世紀を代表する二人のドイツ文学者が、同じような切っ掛けと動機によってサナリー・シュル・メール、パシフィック・パリセイズで亡命生活を送ることになる。

トーマス・マンの日記がなんとか自らの手によって焼却されたという事実は知られており、その理由がホモセクシュアルに関わることであるのも既知のことである。トーマス・マンの日記の対象は、日常の私事にわたる事柄、小説の執筆に関わること、おもに進捗状況、文学の事象、政治、社会的出来事であり、1933年以降であれば、ナチス時代における亡命状況が記述の対象であり、20世紀前半の歴史を私事、公事を織り交ぜながら俯瞰したところに歴史的な意義がある。

1929年にノーベル賞を受賞したトーマス・マンは、ミュンヘンのポッシンガー通りに豪邸を構え、その調度品には格別のこだわりをもつ高踏的な作家でもあり、亡命地にその調度品、文机などを搬送させたのもそのブルジョア趣味のゆえであろう。つまりそれほどに文学的栄誉、富、財産に恵まれたトーマス・マンがドイツを捨て去ることの無念さ、そしていつかは潰えるはずのヒトラー政権に対する怨念は計り知れないものがあり、その私憤を日記に書き込んだのがトーマス・マンだった。

2. バンドル——1933年5月——

フォイヒトヴァンガーは、1933年3月1日にニューヨークを発ちパリを經由してSt・アントンで妻マルタと落ち合い、さらにはベルン、ヴェンゲン、ルガーノ、ベルン、マルセイユを經由して5月3日に南仏バンドルに到着している。一方、5月11日のトーマス・マンの日記にはバンド

ル到着までに立ち寄った先が挙げられている。アムステルダム、ブリュッセル、パリ、アローザ、レンツァーハイデ、ルガーノ、ロールシャッハ、バーゼル、レ・ロッシュ。

バンドルに到着して間もないフォイトヴァンガーとマンは、たびたびカフェで会うことになる。以下に、1933年5月の両者の日記から紹介してみよう。両者はバンドルに到着し荷物を解いて、長旅の疲れを癒しつつ、ヒトラーが政権に就いて間もないドイツ国内の状況について情報交換を始める。

1933年5月9日（トーマス・マン）

「バンドルでは、例の小型トランクの件についてフランクから報告が届くだろうし、いささかの安穩と自信とを手に入れて執筆も捗るものと大いに期待している」。（『トーマス・マン 日記 1933-1934』⁴以下、ページ番号のみ示す）

5月10日（トーマス・マン）

「運転手のハンスが小型トランクの件を密告したことは、いまやはっきりしている。運送業者の話を総合すれば、そうとでも考えない限り、発送が『褐色の家』および政治警察に知れたという事実の説明はぜんぜんつかないだろう」。（87頁）

5月11日、バンドル（フォイトヴァンガー）

「トーマス・マンと妻が現れる。彼はとても親切、彼女は控えめでそっけない。そのあとあたりの別荘を見まわす。楽しい散歩」。（S. 327）

5月12日（トーマス・マン）

「一時間休息。ついで近くの『レゼルヴ』でお茶。そこでL・フォイトヴァンガーにばったり出会い、彼とそのエジプト人めいた風貌の奥さんと、彼の運命ならびに彼が置かれている状況について意見を交換」。（91頁）

5月14日（トーマス・マン）

4 『トーマス・マン 日記 1933-1934』（岩田行一、浜川祥枝、森川俊夫訳、紀伊國屋書店刊、87頁）

「エーリカとクラウス、それにフォイヒトヴァンガー夫妻もくわわり、レゼルヴでお茶。ほかの連中同様ドイツで私の名前に傷がつくことをおそれており、いろいろ付随的な結果を伴わざるを得ない逃亡者という立場に私を追い込みたくないベルマンの意見に、非常に気持ちを乱され、憂鬱だった。しかし、そこから私の全存在にとってどういう結果が生ずるかの見通しは立たぬにしても、ドイツとの関係を断絶して非合法的な存在になることはまず不可避と言ってよく、私は袋小路に追いこまれている。フォイヒトヴァンガーは自分自身のこと以外にはまるで関心がないが、これも、おそらく咎めることは出来ないだろう」。 (94頁)

5月14日、バンドル (フォイヒトヴァンガー)

「大量の郵便、ドイツにかんする不快なことばかり。(略) トーマス・マン、家族とともに現れる。前回よりも楽しい」。 (S. 327)

5月14日の両者の日記を読み合わせてみると、トーマス・マンが故国を捨て去ることに大いに逡巡し、内面の吐露をしているのに対し、フォイヒトヴァンガーはトーマス・マンとの出会いを淡々と記録するに留めている。ここにはこれ以降の日記にも認められることだが、両者が同じような逃走経路と移住によって最終的に、「太平洋のヴァイマル」と謳われたパシフィック・パリセイズで互いを視野に入れた亡命生活を終えるまで、文学的なライバル関係は続くことになる。

5月15日 (トーマス・マン)

「一日中とても強い風。午後、ホテルの庭でお茶にしたあと、町を通り抜け、『かもめ』^{ル・ゴエラン}という名の、場所のいい、感じのよくて安いホテルまで散歩、帰途、フォイヒトヴァンガー夫妻と出会う。老夫妻の歩き方が嫌になるほどゆっくりなので、メーディと私は、たいてい二人を置き去りにする」。 (95頁)

5月18日、バンドル (フォイヒトヴァンガー)

「トーマス・マン、家族とともに現れる、ハインリヒ・マンも、すこぶる楽しい」。 (S. 327)

5月19日 (トーマス・マン)

「けさから具合の悪いKの父親抜きで、レゼルヴでお茶。フォイヒトヴァンガー夫妻に、その友人でいささか女性的なところのあるチェコスロヴァキア人ジャーナリスト。(略) 帰って見ると、

没収されていたとても重い例の小型トランクが私の部屋に届いていた。ミュンヘンで荷造りしたまま、誰も手を触れていないようだ。明らかに、何週間ものあいだリングダウに留め置かれ、放置されたままになっていたのだ」。 (97頁)

5月14日に続き、トランクの件が記され、最も恐れていたトランクの紛失という事態が避けられて安堵している様子と運転手への怒り、ナチ政府への憤怒が書き連ねられている。トーマス・マンが最も恐れたのがホモセクシュアルの発覚であり、なんとしても隠蔽しなくてはならない日記であった。

5月21日 (トーマス・マン)

「書き進めていくにはまことに面白くない作業。憂鬱で不機嫌。(略)午後、ハインリヒと、レゼルヴに泊まっているフォイトヴァンガー夫妻のところへお茶に」。 (98頁)

5月23日 (トーマス・マン)

「毎日の例で書き進めようとするが、神経が参っていて、それが非常なたるみと怠惰になって現れ、朝食後ぜひ先に進もうという気になって机に腰をおろした私を、二、三行後にははや敗北に追いやってしまう。それに、ついに意気消沈し興奮してしまう傾向も依然残っている。(略)Kは両親とトゥーロンへ。私は、ハインリヒおよびフォイトヴァンガー夫妻と『レゼルヴ』でお茶」。 (99頁)

5月23日、バンドル (フォイトヴァンガー)

「首筋がこわばり、悪化。マルタはそれを梅毒だとはっきりいう。彼女には、いつもであらゆる不快な出来事の背景に『罪』を感じとる傾向があるのだ。トーマス・マンとハインリヒ・マンが現れる。親切。仕事を多くこなし、よい仕事になった。夕刻、エーリカとクラウス・マン現れる。かなり楽しい」。 (S. 327)

同じ5月23日の記述を比較しても、トーマス・マンが相変わらず、ホテル住まいからくる不調を訴え、ドイツからの情報にも神経質になり、執筆の進捗しないのを嘆いているのにたいし、フォイトヴァンガーは同業のトーマス・マンとカフェや別荘で会うことによる情報交換の必要性は認めても、執筆に専念しつつ「複数の女性」の調整に勤しみ、「自分のこと以外に」関心を

もつことはなかった。

5月28日（トーマス・マン）

「ふたたび引っ越すとすれば当然いろいろ混乱はあるだろうが、ホテル生活に終止符を打つことはいい結果を生むだろう。

午後、休息の暇なし。老プリングスハイム夫妻（このKの両親はあす出発してくれる。やれやれだ。）I・デルンブルク、フォイヒトヴァンガー夫妻、それにハインリヒの知り合いで英国でのニーチェの編者であるレーヴィ博士を交えて庭でお茶。（103頁）

フォイヒトヴァンガーは1940年10月にリスボンからニューヨークに向けて出航するまで亡命地サナリー・シュル・メールで文学的には多産な時期と二度にわたる抑留生活を過ごす。一方、トーマス・マンは、キュスナハトに移住したあと、1938年にプリンストン大学客員教授に着任し、1941年、パシフィック・パリセイズに定住することになる。

3. 『モスクワ 1937年』と『日記』

「かれは『モスクワ1937年』と題する印象記を発表、アンドレ・ジッドの『ソビエト旅行記』への反論をし、ソビエトでの社会主義建設に全面的支持を表明する。フォイヒトヴァンガーは1920年代から社会主義への関心をもってはいたけれども、決定的な転回点となるのは、この旅行での体験といえる。」⁵このモスクワ紀行がフォイヒトヴァンガーの転回点になったとする受けとめ方、読み方が、これまでの『モスクワ 1937年』の一般的な受容であった。

1920年代から1930年代にかけてソヴィエト連邦は、積極的に反ファシズムの多くのドイツ人作家、芸術家をモスクワに招待していたが、そのなかにはオスカー・マリア・グラーフもいて、実際にかれは1934年にソヴィエトを訪問し、『ソヴィエト紀行 1934年』を著した。グラーフがソヴィエトへの擁護、支持を表明した背景には、フォイヒトヴァンガーと同様に、ソヴィエトのみが反ナチス運動の拠点であるという認識が強く働いていた事情がある。グラーフは翻訳家の

5 長橋美生子「雑誌『ダス・ヴォルト』とL・フォイヒトヴァンガー」（『言葉の力で ドイツの反ファシズムの作家たち』所収（1982年、新日本出版社、240頁）

イザベラ・グリューンベルク宛ての書簡（1937年1月3日）で、ソヴィエト連邦の19回目の記念日に、レニングラードの国営出版社から本を贈られて大いに感動し、それへの感謝の手紙がモスクワラジオで朗読されたのを聴いて心臓が高鳴ったという。さらにこの書簡のなかで、スターリンについて帰依にも似た心情を吐露している。「ようやくスターリン憲法の草案を読むときがきて、私は深い感動をおぼえました。（略）この憲法をつくった男は、疑いなくすばらしい人物です。（略）歴史にのこる出来事を追いかけて、偉大な人間と知り合いたい気持ちになります。あなたがたソヴィエトの人間はなんと幸せな人びとなのでしょう！ほんとうにうらやましいです」。⁶1937年1月の時点で、スターリンの肅正の荒らしが吹き起している実状にまったく気づいていないことがこの文面からも判る。

フォイトヴァンガーはソヴィエト作家同盟の招きで、1936年12月1日から2月7日まで1936年12月から1937年2月にかけて10週間にわたって、モスクワに滞在することになる。フォイトヴァンガーが亡命生活を送っていた、「ドイツ文学の首都」サナリーには、ベルトルト・ブレヒトもデンマークの亡命先から訪れ、反ファシズム戦線の情報交換をする機会をもっていた。両者は、モスクワで刊行されていた亡命誌『ダス・ヴォルト』の共同編集者という立場でもあり、遠隔地から編集方針、掲載作品をめぐる熱心に関わっていた。亡命作家としてモスクワに親近感があったこともこの訪ソの印象と関係していたわけである。

アンネ・ハルトマンによれば、フォイトヴァンガーのモスクワ滞在中に通訳として付き添ったドラ・カラヴキナの上司への報告は、フォイトヴァンガーのソヴィエトに対する評価は、全般に厳しく、懐疑的であり、モスクワの生活状況に感動している様子はなく、ソヴィエトの民主主義、表現の自由には批判的な評価を下している、という内容である。この証言を裏付けるように、フォイトヴァンガーの日記もソヴィエト全般にたいし多層的、多面的な評価になっている。親ソヴィエト、スターリンの擁護者という視点だけで捉えることには無理がある所以である。

『モスクワ 1937年』の全体に言えることであるが、きわめてアンビヴァレントな記述の多いことが最大の特徴であり、ソヴィエト連邦の社会主義そのものの肯定か否か、スターリンの肅清裁判にたいする見解、偶像崇拜にたいする見解、これらのモスクワ視察の重要な項目においてフォイトヴァンガーは、二項対立的な視点で観察している。たとえば、「まえがき」の記述はその格好の例である。「私は一人の『共感者』として旅行の途についた。そうだ、私はそもそも

6 Oskar Maria Graf in seinen Briefen, hrg.von Gerhard Bauer und Helmut F. Pfanner, München, 1984, S. 107.

の最初から、世界中で理性の基礎のうえに巨大な国家を建設しようとする実験に共感し、この実験が成就するようにと期待を抱いてモスクワに赴いたのである。⁷このように「共感者」の立場であると同時に、つぎの引用文のように、「独裁国家」であるソヴィエト連邦に疑問を投げかける場面もある。「しかしながらこの私の共感には最初から疑念が混ざっていた。実践的な社会主義は階級の独裁によってこそ実現できるものであり、ソヴィエト連邦はひとつの独裁国家でもあった」。(S. 9) このように、『モスクワ 1937年』はフォイヒトヴァンガーの共感と疑念がない交ぜになって成り立っていることが特徴になっている。「私が否定すべきものを多くみて、肯定すべきものはわずかしかなかったとしてもなにも問題はないだろう」。(S. 12) ソヴィエト敵視の世人の理解では刻々と変化するソヴィエトの実態を捉えられないというわけである。プラウダに掲載したフォイヒトヴァンガーの論文は、西側には誤解をあたえたが、このような誤解と無理解を是正するために筆を執った事情をつぎのように述べている。「私はモスクワで、自分の印象をさほど多く発表することはせず、200行足らずのきわめて短い文章で、それも称賛だけというわけではなかった。(略) このわずかな文章でさえ、非難を受けただけでなく、曲解され、野卑な言葉を投げつけられた。私はそれでもまだソヴィエト連邦について語るべきだろうか」。

(S.12) フォイヒトヴァンガーの執筆の動機としては、まずソヴィエト連邦の変革を目指した社会主義の実験がどのように進捗し、功を奏しているか、観察することが目的であった。以上の点に留意しながら、フォイヒトヴァンガーの滞在期間における日記から抜粋してみる。

12月6日、日曜日

「ロシア憲法の施行を機に大デモンストレーション」。 (S. 400)

12月10日、木曜日

「(略) ひじょうに多くの聴衆。荒っほい祝賀を受け、話さざるをえなくなる。りっぱにやった。そのあと多くの人間と退屈にすごす」。 (S.401)

12月14日

「(略) それからプラウダに行く。立派な設備。編集局長のメフリスと長い話し合い、はじめはごちなかったが、そのうち気楽に。魅力的な男であり、私にジッドにかんする記事、ドイツの

7 Lion Feuchtwanger, Moskau 1937, Amsterdam 1937, S. 8.

亡命者にかんする記事を書いてほしいという」。 (S. 401)

12月17日、木曜日

「(略) 夕方、私のために文学の宴。モスクワ在住の有名な文学者、批評家がほとんどすべて出席。イルフ、ペトロフ、レオノフ、ディナモフ、国立出版局の面々、すべてのドイツ人。大いに祝賀される。美味しい食事。短く話す。そのあとまだエイゼンシュテイン、黒人歌手ロブソン、ボロディンと話す」。 (S. 402)

12月27日

「(略) マリアが『プラウダ』の指示でジッドにかんする記事の変更を望んでいる。大いに祝賀される」。 (S. 404)

12月28日

「私の本にかんする興味深い議論。トレチャーコフが語る。大いに祝賀される」。 (S. 404)

12月30日

「ジッドにかんする記事が『プラウダ』に掲載される、しかも検閲による削除はなし」。 (S. 404)

1937年1月3日

「それから『イズベスチャー』の編集主幹、検閲局長官であるタルのところに。外交的な会談。スターリン、ヴォロシロフ、カガノヴィッチと面会することになる」。 (S. 405)

1月8日、ソスニ

「風邪のため睡眠はすこぶる悪し。朝方の連絡で、スターリンのところには昼間行くことになる。下剤を服用し眠れず、風邪を引いているので、きわめて不快な一日。タル、マリア、アネンコーヴァが私を迎えにくる。スターリンと3時間話したが、最初は作家の自由に関し回りくどい言い方になる、むずかしいのは通訳のせいでもある。それからスターリン崇拜、つぎに『民主主義』、つぎに裁判について話した」。 (S. 406)

1月9日 ソスニ

「(略) 全紙で、スターリンとの私のインタビューが大見出しで掲載されている」。 (S. 406)

1月20日

「(略) アネンコーヴァがきて、裁判についていくぶん神経質に説明する」。 (S. 408)

1月23日

「(略) 革命劇場について話し合う。それからピャタコフーラデク裁判に。疲労困憊。昼にはかなり疲労。数多くの私の知り合い。午後ふたたび裁判、夕方遅くまで」。 (S. 408f)

1月24日

「ふたたび裁判。下手な通訳をする間抜けなアネンコーヴァがじゃまとなる」。 (S. 409)

1月25日、月曜日

「早朝、エーファと交わる。裁判には行かず。裁判にたいする私の見解がソヴィエトの新聞に大きく掲載」。 (S. 409)

1月26日

「(略) 午前、裁判に。かなり乏しい中身」。 (S. 409)

1月27日

「(略) 早朝、裁判に。さほど興味湧かず」。 (S. 409)

1月29日

「ラデクの裁判に。ひじょうに多くの人間。待ちくたびれる。被告の発言が印象深い。(略) ソヴィエトの新聞に裁判について小記事を書く。夜の判決をいつまでも待つ。メフリス。タル。それから判決。ラデクの恩赦はすべてをいかがわしく、茶番にしている。朝4時」。 (S. 409)

1月30日

「(略) 私の小記事がプラウダに載る」。 (S. 409)

まず、確認しておかなくてはならないのは、フォイトヴァンガー、オスカー・マリア・グラフ以外にも、シュテファン・ツヴァイク、エルンスト・トラー、ヨハネス・R・ベッヒャー、ヴェーラント・ヘルツフェルデなどの反ファシズムの作家が戦略的にモスクワに招待されたということである。そのなかでも西側のベストセラー作家であるフォイトヴァンガーは、どこでも「大いに祝賀され」最高級の厚遇を受けている。さらに、フォイトヴァンガーは亡命誌「ダス・ヴォルト」の編集人でもあり、モスクワ訪問まではサナリーから編集に参加していたが、反ファシズムの共同戦線の構築を目指すこの亡命誌の存続のために訪問したいという希望ももっていた。

このような心的、外的な状況下でのスターリンとの会見であることに留意しつつ、1月8日のスターリンとの会見の記述を読むと、意外にも事実の報告という体裁であり、『モスクワ 1937年』にも記載されているように、モスクワの現状、作家の自由、デモクラシー、モスクワの公開裁判について淡々と意見交換した、と類推される。しかもフォイトヴァンガーは裁判に関心は乏しく、裁判に否定的な表現が目立ち、懐疑的でもある。とくにピャタコフ・ラデク裁判、そして彼らの恩赦についても懐疑的な反応をみせている。

この懐疑的な反応に注目して、読みすすめると新たな事実につづかる。1937年3月9日の日記に、「ロシアを対象にして少し読書。私がいかに情報不足であるか」(S. 362)という記述がある。この時期はちょうど『モスクワ 1937年』の執筆、校正の時期であり、フォイトヴァンガーはモスクワ訪問を総括するにあたり、つぶさに見聞したはずのモスクワの印象を覆す事実突き当たったような書き方になっている。見えている部分と隠蔽されている部分との落差に驚きを示している格好である。

最後に、このモスクワ訪問には愛人エーファ・ヘルマン、マリア・オステンも同行し、モスクワでも、女優、通訳、そのほかの女性との性的な関係はこれまで同様に日常的に頻発する。これは日記が浮き彫りにした新たなフォイトヴァンガー像なのか。このテーマは、稿を改めて論じたい。